安部公房

第四間氷期
人間そっくり
他 11篇

世界SF全集

27

早川書房

世界ＳＦ全集　27

安部公房　第四間氷期　人間そっくり
他11篇

〈検印廃止〉

1971年5月20日初版印刷　1971年5月31日初版発行
発行者　早川　清　東京都千代田区神田多町2～2
発行所　株式会社早川書房　東京都千代田区神田多町2～2
電話　東京（254）1551～8　振替　東京47799
印刷所・株式会社亨有堂印刷所　製本所・株式会社明光社
本文用紙・本州製紙株式会社
表紙クロス・日本クロス工業株式会社
函紙・冨士加工製紙株式会社
製函所・株式会社佐藤製函所　定価 980円

〈乱丁本・落丁本は本社にてお取り替えいたします〉 0393-803270-6942

目次

第四間氷期……3
人間そっくり……175
R62号の発明……279
赤い繭……305
闖入者……311
人肉食用反対陳情団と三人の紳士たち……339
永久運動……349
魔法のチョーク……371

デンドロカカリヤ……385
詩人の生涯……405
完全映画（トータル・スコープ）……423
盲腸……441
鉛の卵……457
解説〈奥野健男〉……483

函・扉・表紙／勝呂　忠

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第四間氷期

序曲

死にたえた、五〇〇〇メートルの深海で、退化した獣毛のようにけばだち、穴だらけになった厚い泥の平原が、とつぜんめくれあがった。と見るまに、くだけちって、暗い雲にかわり、わきたって、透明な黒い壁を群らがって流れるプランクトンの星々をかきけしていった。

ひびだらけの岩板がむきだしになった。それから、暗褐色に光る飴状のかたまりが、おびただしい気泡をはきだしながらあふれだし、数キロメートルにわたって古松の根のような枝をひろげた。噴出物がさらに量をまし、その暗く輝くマグマも姿をけした。あとはただ、巨大な蒸気の柱が、海(アンスクラ)雪をつらぬいて渦まきふくれあがり、くだけながら、音もなくのぼってゆく。だがその柱も、海面にとどくはるか手前でぼう大な水の分子のあいだに、いつかまぎれこんでしまっていた。

ちょうどそのころ、二カイリばかり先を、一隻の貨客船が横浜にむかって航行中だったが、船客も乗組員も、ときならぬ船体の振動ときしみに、一瞬わずかなとまどいを感じただけだった。また、ブリッジに立っていた二等航海士でさえ、あわただしくはねあがったイルカの群と、かすかではあったが急におこった海の色の変化に目をみはりはしたものの、べつだん日誌につけるほどのことだとは考えなかった。空には七月の太陽が、融けた水銀のように輝いていた。

しかし、そのときすでに、目にはみえない海水の振動が、やがて大津波になろうとして、信じがたいほどの波長と時速七二〇キロの速度で、海中を陸地にむかって走りつづけていたのである……

プログラム　カード　No・1

電子計算機とは、考える機械のことである。機械は考えることはできるが、しかし問題をつくりだすことはできない。機械に考えさせるためには、プログラム・カードという、機械の言葉で書かれた質問表をあたえてやらなければならないのである。

1

「どうでした、委員会は？」

私が入っていくと、監視器をのぞきながら、記憶装置の調整をしていた助手の頼木が、振向いてたずねた。私はよほど情ない顔をしていたらしく、彼は返事も待たずに、溜息をついて道具を投げだしてしまった。

「乱暴するなよ！」

頼木はしぶしぶ、身をこごめてドライバーをすくいあげると、腕をぶらぶらさせながら顎をつきだした。「でもいったい、何時になったら、仕事にありつけるんです？」

「そんなこと、知るもんか」

私は自分が腹をたてていたから、他人が不機嫌なのをみると、よけい苛々してくるのだ。上衣をとると、手動制御装置の上にたたきつけてやった。そのはずみに、機械が勝手に動きだしたような気がした。むろんそんなはずはない、錯覚にきまっている。しかし、その瞬間、なにかすばらしい考えがちらりと浮んだように思った。あわてて思いだそうとしたが、もう忘れてしまっている。ちくしょう、なんて暑いんだろう……

「なにか代案は出たんですか？」

「出るもんか」

しばらくして、頼木が小声で言った。

「ちょっと、下に行ってきます」

「いいよ、どうせ暇なんだ」

私は椅子にかけて目を閉じた。頼木のサンダルの音が遠のいていく。日本の若い研究所員というのは、どうしてあ

あ必らずといっていいくらい木のサンダルをはきたがるのだろう？　まったく奇妙な風習だ。遠ざかるにつれて、しだいに足どりがせわしくなっていく。……どうやら、だいぶ勢いこんでいるらしいな。

目を開けると、棚にならんだ四冊のスクラップが、ひどく意味ありげにうつって見えた。例のモスクワ1号の完成以来、ここ三年間の予言機械に関する記事の切り抜きである。あれが私の歩いてきた道だ。そしてその最後のページのおわるところで、私の道も消えかかっている。

2

その第一ページ目が、例の変節した科学評論家の文章ではじまっているというのは、なんとしても皮肉なことだ。「専門家は月をひらけ！」と、まるで自分が予言機械の発明家になったみたいな書きだしではじまっている。「ウェルズのタイム・マシーンが幼稚だったのは、時間旅行などと言いながら、けっきょくは時間の推移を、空間的に翻訳してしか捉え得なかったところにある。人はバクテリアを、顕微鏡という間接的な手段をとうしてみる。しかしその場合、肉眼で見たわけではないからといって、見なかったといえば間違いだろう。同様に、予言機械《モスクワ1号》によって、人類はたしかに未来をこの目で見てしまったのだ。ついにタイム・マシーンは実現した！　いま、われわれは、文明史のあらたな曲り角に立っているのだ！」

なるほど、そう言って言えなくもないだろう。しかし、いかにも、大げさすぎる。私に言わせてもらえば、彼が見たのは、未来でもなんでもなく、ちょっとしたニュースの一場面にしかすぎなかったのだ。

その映画は、こんなふうにはじまっていた。――まず最初に、正午をさしている時計と、ひらいた大きな手。その横に、テレビがあって同じ場面がうつっている。時計が一時をさすと同時に、その手を握るように命令があたえられる。技師がコンソールのダイヤルをまわし、一時間後になって、ブラウン管の中の手だけがぎゅっと固くにぎりしめられるのだ。

それからまた、こんな実験もあった。驚かされたという信号で、ねむっていた映像の小鳥が急に飛びたち、手をはなすという信号で、映像のコップが床におちて粉々にくだけちる……

たしかに、びっくりしても、おかしくはない。私だって、

最初は相当にどぎもをぬかれたものだ。だが問題はそんなことではなかったのだ。三年たって……スクラップでいえば、四冊目になって、この同じ男が、一体どんなことを言いだしたかというこうである。

「真の意味では、この世に予言などというものはありえないだろう」と文章までが、うってかわった不潔な感じになり、「たとえばある人間が、一時間後に、穴におちると予言されたとする。分っていながらおっこちるような馬鹿が、どこにいるものか。もしいたとしたら、よほど暗示にかかりやすいお人好しにちがいない。これはもう、予言などというものではなく、ただ暗示にかかったというだけのはなしだ。予言機械などという。体裁のいい嘘はもう止しにして、正直に、人間の弱味につけこんだ暗示機械とでも改名したら如何……?」

けっこうな話さ、なんとでも勝手に改名してくれたらいい。一事が万事、なにもこの男にかぎったことではなかったのである。誰もがたちまち、反対意見にくらがえしてしまった。以来私は、まるで危険人物あつかいだ。

3

一冊目の、二ページ目には、しかしまだ私の笑顔の写真がのっていた。下の記事は、モスクワ1号についての、私の談話である。

「むろん、トリックということは考えられない。理論的には、じゅうぶん可能性のあることだ。しかし、従来の電子計算機とくらべて、べつに本質的なちがいがあるとも思えない、と、中央計算技術研究所の勝見博士は、専門家らしく、きわめて冷静にこう語った……」

だが、そいつは嘘だ。私はただ、ひどく焼餅をやいてしまっていただけである。私があまり気のない返事をするので、腹をたてた記者の一人が、こんなことまで言いだした。

「じゃあ、先生にもすぐにつくれるというわけですね?」

「まあ、時間と金があればね……」これはある程度、本心でもあった。「大体電子計算機というものは、もともとある種の予報能力はもっているものなんだ。問題は、機械そのものよりも、それを使いこなす技術でね。プログラミング……つまり、機械に分る言葉で問題をつくってやる仕事だが、これがむつかしい。今までの機械では、どうしても人間がやらなけりゃならなかったんだ。しかし、モスクワ1号というやつは、このプログラミングを、どうやらかな

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

りの段階まで自分でやれる機械らしいね」
「では、この機械で、将来どんな可能性が考えられるか、一つ夢みたいなものを語っていただけませんか」
「さあ……一般に予想というやつは、時間の大きさに逆比例して、加速度的に有効性をなくしていくものだからな。ニュースでも分るとおり、予言の範囲は、案外限られているんじゃないか。コップをおとせば割れるくらい、なにも予言機械に教えてもらわなくったって、小学生だって知っていることでしょう。教材程度のことには、いろいろ用途も考えられるだろうが、あまり空想的な期待は、やはりつつしむべきだと思いますね」
　それどころか、腹のなかを打ち明けて言ってしまうと、私は焼けつくような嫉妬で、居ても立ってもいられなくなっていたというのが、本当のところだったのである。じっとしていれば、それだけ後にとり残されてしまうのだ。なんとしても、自分の手でつくってみなければ気がすまない。私はすぐさま、所長や二、三の知人を説いてまわった。しかし誰も、好奇心以上のものは示してくれなかった。だから、私と同意見のものとして、ならんで載ったある小説家の言葉には、まったく迷惑させられたものである。（無知ほどもっともらしく見えるものはない……）
「すべてを必然の型にはめこんでしまおうとする共産主義者なら、機械に予言されてしまうくらいの未来しか、持てないのが当然かもしれない。しかし、未来を自由意志でつくりだすわれわれには、おそらくなんの役にもたたないだろう。むりに写そうとしても、ガラスのように透明にすきとおってしまうのではあるまいか。……私はなによりも、予言の信仰が道徳心を麻痺させることを恐れている」
　しかし、やがて、チャンスがおとずれた。スクラップの二冊目を開けてみよう。モスクワ1号は、私が懸念していたとおりの性能を発揮しはじめたのである。夢どころか、おそろしく現実的で無味乾燥な予言を次から次へと矢つぎばやに送ってよこした。はじめは、すばらしく正確な天気予報を、それから、産業経済面の予報を……。
　あのときの困惑は、ちょっと一口では言えるものではない。いきなり、その年の米のとれ高が予告された。これはまあ、あと半年もたってみなければ分らないことだからと、たかをくくっていると、つづいて——
　上四半期の全国銀行勘定
　今後一カ月間に見込まれる不渡手形
　ある百貨店の売上げ予想

名古屋市翌月の小売物価指数
東京港在庫見込高

とつづけさまに予告をうけ、しかもそれらが、但し書きの誤差率をはるかに下まわる確度で的中しはじめたのだから、驚かざるをえないわけだ。さらに、この一連の予言を終えるにあたっての挨拶というのが、まことに人をくったものだった。

《モスクワ1号は、なお貴国の株価指数、ならびに生産在庫の比率予想なども可能である。しかし、経済不安をおこすおそれなしともしないので、それは遠慮したい。われわれが望んでいるのは、あくまでもフェアーな競争以外のなにものでもない……》

狼狽があまりはげしかったので、新聞も必要以上の論評はさしひかえた。他の自由諸国で、同様の予想をうけたらしいが、やはり黙りこんでいた。見苦しい沈黙がつづいた。と言っても、ただ黙ってじっとしていたと言うわけではない。政府も、財界の要請で、そろそろ腰をあげなければならなくなりはじめていたのである。

まず、中央計算技術研究所のなかに、分室という形で、予言機械の開発部が設置された。そして私が分室長に任命され——日本でプログラミングを専門にやっているのは私一人なのだから、これは至極当然のなりゆきだ——望みどおりに、予言機械の研究に没頭できることになったわけである。

スクラップ第三冊——

約束どおり、モスクワ1号は、沈黙を守ってくれている。頼木は、少々不作法なところがあるが、なかなか有能な助手だ。仕事は順調にすすみ、二年目の秋にはほとんど完成して、テレビの中の未来で、コップを割ってみせるくらいのことは出来るようになっていた。（自然現象の予言は、比較的容易なものである）幾つかの簡単な実験をやってみせるたびに、私と機械の名声はあがり、期待も増した。しかし、憶えている人もいることと思うが、例の競馬の予想のときには、さすがに関係者も動揺して、どたんばになって取止めを申し入れてきた。あのとき私は、機械の力のあらわれだぐらいに、単純に考えて得意がっていたものだが、今になって考えてみると、やがて私たちが除け者にされてしまう、不吉なまえぶれだったのかもしれない。（世間が幾本の柱で支えられているかは知らないが、すくなくもその中の三本は、不明と無知と愚かさという柱らしい。だが当時は、すくなくも登り坂で、期待にあふれていた。とく

に子供たちのあいだでの人気は大変なもので、私は三色刷の漫画本の中にまでしばしば登場の光栄に浴し、ケイギケン分室を根城に、ロボットたちをひきつれ（本物の機械はほぼ二十坪ほどの広さいっぱいに、ヨの字型に配置された、巨大な鉄の箱の列なのだが、漫画の中ではやはりどうしてもロボットにしないと具合がわるいらしい）、あらゆる未来に先まわりして、悪漢たちをやっつけてまわっていたものである。

やがて、機械の装備は充分だと思われたので、あとはもっぱら訓練と教育に専念することにした。人間だって、脳をもっているだけで、教育や経験がなければ役に立たないと同じことだ。とくに経験は脳の栄養である。しかし機械は自分で出まわることは出来ないから、われわれ人間が手足になって歩きまわり、データを集めてきてやらなければならない。金と人手をくうばかりの、退屈な根気仕事だ。（データがとかく経済面に偏りがちだったのは、この研究所の性格や、モスクワ1号の予言の心理的影響などからして、やはり止むをえないことだった）

機械は、ほとんど無限の消化力をもっている。食べさせてやると、適当に自分で消化して、すっかりどこかに貯えてしまうのだ。そのうち、どこかの《系》が飽和してくると、飽和したところから、その合図が返ってくる。するとその部分は、それでプログラム設計の能力を与えられたことになる。

ある日、最初の合図があった。これで彼は、自然現象のなかの、曲線であらわしうるすべての函数関係を飲込んでしまったわけだ。さっそく力だめしをやってみる。水につけた豆粒の四日後の成長を、ブラウン管に結像させてみたところ、十センチばかりのモヤシになるまでを、見事に写しだしてみせてくれた。今後の成長は速いだろう。その日を記念して《KEIGI—1》という名前を正式に発表した。

しかしここで三冊目を閉じ、四冊目にうつらなければならない。事情が急転してしまうのである。

4

私たちは、予言機械の誕生を盛大に祝う計画をたてていた。最初になにを予言させたらいいか、各方面にアンケートを出して、問い合わせたりしていた。そのための委員会がつくられ、新聞社も手ぐすねひいて待っていた。そこに突然、モスクワ2号完成の報せが入ったのである。

ニュースは意地のわるい土産をもってやってきた。私はそのニュースを朝早く、新聞社からの電話で聞かされた。

「モスクワ2号の予言、お聞きになりましたか？　なんでも三十二年以内に、最初の共産主義社会が実現し、八十四年頃に最後の資本主義社会が没落するだろうっていうんですが、先生、いかがでしょう……？」

私は、思わず笑いだしていた。しかし、考えてみれば、ちっともおかしいことなんかない。それどころか、こんなに消化不良をおこしそうな話は、あまり聞いたこともないくらいだ。

研究所でも、もっぱらこの話題でもちきりだった。私は、なにか嫌なことがおきそうな予感に、気が滅入ってならなかった。

若い研究員たちが話し合っている。

「機械のくせに、案外ふるいことを言うわねえ……」

「どうして？　本当かもしれないじゃないか」

「無理に言わせたのじゃないかしら？」

「ぼくもそう思うね。大体、未来がなにかの主義にならなきゃいけないなんて、おかしいよ」

「主義と考えるからおかしいんだろう。もっと単純に、生産手段が私有されている状態から、そうでない状態にだね……」

「でも、そうでない状態が、共産主義だけなんて断言できるかしら？」

「馬鹿だなあ、それを共産主義っていうじゃないか」

「だから、古いっていうのよ」

「分らねえんだなあ……」

「だって、主義ってのは、認識の方法でしょ？　方法と現実とはちがうわよ」

「へえ？……そういう考えの、一体どこが新しいのか？」

それから、彼らは私のところへ集ってくる。そういう問題について、私たちの機械も、なにかを予言できるだろうか？

「なあに、いまに、フルシチョフの前歯の何本目がまっさきに抜けるかを予言して、鼻をあかせてやるさ」

残念ながら誰も、笑ってくれはしなかった。

翌日、アメリカでの反響が報道された。「予言と占いとは根本的にちがったものであり、道徳心を前提にしたものだけが、はじめて予言の名に値いするものだ。それを機械にまかせるなど、まさに人間性の否定というよりほかはない。わが国でも、すでに早くから予言機械を完成していたが、良心の声にしたがって、その政治的使用はさけてきた。

このたびのソ連のやりかたは、平和共存の掛声を裏切って、国際友好ならびに、人間の自由をおびやかそうとするものである。われわれは、モスクワ2号の予言を、精神に対する暴力であると考え、そのすみやかなる破棄と撤回を勧告する。万一、容れられない場合は、国連に提訴することも辞さないつもりだ。(ストローム長官談)」

友邦アメリカの、この強硬な態度が、私たちの仕事に影響をおよぼさぬはずがなかった。恐れていたことが、ついにやってきたのだ。三時ごろ、所長を通じて、プログラム委員会の再編と、新しいメンバーによる緊急会議の通知をうけた。まったく、統計局の、一方的なやりくちだ。私と所長をのぞく、技術関係者がほとんどいなくなり、顔ぶれも変って、人数も減っていた。

場所はいつものとおり、本館の二階だったが、新婚夫婦の離婚時期を予言したらどうなるかなどという、罪のない冗談をとばしあった、これまでの会議とはまるで雰囲気がちがっていた。世話役をしていた友安という統計局の役人が、最初に立ってこうあいさつした。

「……本委員会は、従来からの名称を引継いではおりますが、実質的には、まったく別のものと考えていただきたい。つまり、一応研究期間はおわったものとみなし、プログラム編成の決定権をあらためて本委員会におくことに、関係閣僚の意見の一致をみたわけです。つまり本委員会の決定なしには、予言機を動かせないというわけですな。研究ということなら、自主性も尊重されねばなりませんが、実用段階に入りました以上、責任の所在がまず明確にされねばならんと、まあさようなわけです。なお、今後は、非公開のたてまえでやっていきますから、その点、くれぐれも注意してください」

次に、ひょろりとした新顔が立上る。なにやら長い肩書きを言ったが、よく分らなかった。要するに、大臣の秘書のようなものらしい。神経質に、細長い指を折りながら、

「このたびの、モスクワ2号のやりかたを見ておりますと、アメリカ当局の見解にもみられますように、多分に政治的な意図がうかがわれる……たとえばですね、まず1号でわれわれの好奇心をあおっておき、対抗上、こちらも予言機械をつくらざるを得ないような羽目に追いやる。その点は、現に、そのとおりになったわけですが……(なにも私の顔を見ることはないじゃないか!)……ところで、いよいよ、こちらが実用段階に入ったとみると、とたんにそれを政治的に利用するわけだ。そんなふうに出られると、ついこちらも、政治予言をしなければ悪いような気がしてくる。言

ってみれば、まんまと、自分の手で予言機というスパイを呼びこんでしまったようなものですな。この点を、とくと考えていただきたい。うっかり、乗せられたりすることのないようにですね、その点を、しっかりわきまえていただきたいわけです……」

私は発言を求めた。所長が心配そうに私を眼の端でうかがっている。

「すると、これまでのメンバーで検討したプログラムの案はどういうことになります？　むろん、あれはあれで、すすめていいわけでしょうね？」

「あれ……？」ひょろりとした奴が、友安の書類をのぞきこむ。

「三つばかりありましたね……」と、友安があわてて書類をめくってみせる。

「三つじゃないよ、第一案は、はっきりきまっている。機械化の速度Kに対応する商品の価格と労賃の問題です。ただ、どこの工場をモデルに選ぶかということが……」

「待ってくださいよ、先生」友安がさえぎって、「決定権が委員会にうつったのは、この会議からなんです。これまでのことは、一応御破算にしていただかないと……」

「しかし、その方針で、ずっと準備してきたんですよ」

「そいつはまずかったですなあ」と、ひょろりとした奴が口をすぼめて笑い、「その案は、やはりまずいでしょうな。きわどいところで、政治問題にむすびつく。お分りでしょう？」

すると、それに合わせて、ほかの委員たちもどっと笑いだした。なにがおかしいのやら、私には分らない。じつに嫌な気持がした。

「分らんですね。それじゃまるで、モスクワ2号の勝をみとめたのと同じことじゃないですか」

「それそれ、そういう考えが、向うの思う壺なんだ。気をつけてくださいよ、本当に……」

そこでまた、一同、声をそろえて笑いだす。なんていう馬鹿らしい委員会だ。私はもう、反対する気もしなくなっていた。私だってべつに政治が好きなわけじゃない。しかし、第一案が駄目なら、はやく代案をたてなければ困るのだ。

「では、第二案でいきますか？　現在の率で金融引締めをつづけた場合の、五年後の雇用状況というんだが……」

「それも、まずかろうね」ひょろりとした奴が同意を求めるように、委員たちを見まわす。

「しかし、そんなことを言っていたら、政治に結びつかな

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com